

## 強き者

鍛え抜かれた肉体、鋭い眼光、小憎らしいほど強いあの横綱が、精神安定剤を服用していると報道された…。真偽のほどは判らぬが、批判され非難されて、平然とできる人間などいないという事であろうか。あるスポーツ選手も飲酒運転で捕まって、涙の謝罪をしていた。今度の参議院選挙は自民党の惨敗で、総理大臣の支持率も最低になったとか。世の中は、良し悪し紙一重、手のひらを反すと言うが…。

こんな話がある。

お釈迦様が弟子たちを連れて、旅をしておられた。釈迦を快く思わぬ者が、釈迦の悪口を町中に言いふらして回った。町に入って弟子たちは、托鉢をしても何一つもらえず、ただ、<sup>そし</sup>誹りや罵倒する声を聞かされるだけであった。

弟子が釈迦に言った。

「こんな町に滞在する事はありません、もっと良い町があります。早く出て行きましょう」  
お釈迦様は、静かに弟子に訊ねられた。

「次の町でも、この様であったら、どうするのか？」

「また、ほかの町に行きます」

「それでは、きりがない。誹りを受けたのなら、それに耐え、誹りの終るのを待って、他に  
移る事がよい」と諭されたのである。

更に続けて言われた。「利・害・中傷・誉れ・讃え・誹り・苦しみ・楽しみ この世の八つ  
の事柄で動かされる事はない。このような事は、間もなく過ぎ去ってしまう…」と。人間関  
係の脆さ、弱さや危うさを言いつている。些事に一喜一憂して、心が定まらぬ自分が恥ずか  
しい。

中年サラリーマン氏の、糟糠そうこうの妻が急逝した。仕事に追われて、家庭の事など見向きもし  
なかつた人である。既に成人した子供たちからは、「お母さんが、可哀相だ」と責められ、通  
夜から葬儀へと、涙をみせることもなく淡々と事を進めた。この人を親類の者までが、冷た  
い男だと陰口を囁きあつた。儀式のすべてが滞りなく終り、白い骨箱を自宅の急ごしらえの  
祭壇に安置して、ほっと一息ついた…。

食事をしようかと冷蔵庫の扉を開けたら、亡くなった奥さんが入院する前日に調理をし  
て、冷凍庫に数日分の惣菜を用意してくれていた。ご主人が困らぬように、一つ一つにメモ  
を書いて残していた。レンジで温めて、一口食べたなら、妻との数十年が胸に去来して、涙が  
止まらない。非難はしても娘である。父の夕餉ゆうげを心配して、後から実家に来た娘は、その目  
ではつきりと、肩を震わせ声をあげて泣く父の背中を、声もかけられずに呆然と見ていた。  
そんな父を見るのは、初めてであつた…。

---

母が父の為に残しておいた料理の数々、その母に対する父の気持ち……。深い絆を教えられたと娘は言う。

人間には、じっと耐え忍ぶ時間も、無駄ではないような気がする。忍耐力の弱くなった現代人だと指摘されるが、要求することは得意だが、耐え忍ぶことが出来ない。

『ただ一向にそしらるる ただ一向にほめらるる かかるものなし』

かかるもの 過去にも 現在にも 未来の日にも あることなからん』(法句二百二十八番)

過去、現在、未来において、ただ非難されるだけの人も、ただ称賛されるだけの人もいない、という意味の言葉である。スポーツ選手や政治家、教師、上司を責めるのは簡単だが、責めるだけの資格が自分にあるのか、と問うてみる事も大事なことであろう。

(平成十九年九月号)